



Data

監督・脚本：ウディ・アレン
出演：ケイト・ブランシェット／サ
リー・ホーキンス／アレク
ク・ボールドウィン／ピータ
ー・サースガード／ボビー・
カナヴェイル／ルイス・C・
K／アンドリュー・ダイス・
クレイ／マイケル・スタール
バーグ／タミー・ブランチャ
ード／マックス・カセラ／オ
ールデン・エアエンライク

👁️👁️ みどころ

女の幸せは、大成功を収めた男との結婚。本作の一部だけを見ればそう思えるが、やはり男と女の仲は不可解。だからこそ、80歳近いウディ・アレン監督もその道一筋で追求しているのだろう。

章子怡（チャン・ツイイー）vs ケイト・ブランシェットの「ジャスミン比較」も大切だが、本作では、惜しくも助演女優賞を逃した妹役のサリー・ホーキンスとの対比も大切。女のウソはさまざまな形、場面で表れるが、さて本作では？

ラストシーンを十分味わいながら、なぜ本作でケイト・ブランシェットがアカデミー賞主演女優賞を受賞できたのかを、じっくりと鑑賞したい。おめでとう、ケイト・ブランシェット！



■□■章子怡VSケイト・ブランシェットのジャスミン比較■□■

本作で第86回アカデミー賞主演女優賞を受賞したケイト・ブランシェット演ずる本作のヒロイン、ジャスミンは実は本名ではない。彼女の本名はジャネットだが、なぜ思い切った「スカーレット」のようなド派手な名前にせず、少しだけ本名をもじったようなジャスミンと名乗っているの？ジャスミンと聞けば誰もがすぐにジャスミンの花やジャスミン茶を連想する。ちなみに、尾崎亜美が作詞・作曲し、杏里が歌って大ヒットした『オリビアを聴きながら』（78年）では、ジャスミン茶は「眠りを誘う薬」とされているが、さて…？

私がジャスミンと聞いてすぐに連想したのは、「中国四大女優」の一人で、アジア・ビューティーを代表する女優・章子怡（チャン・ツイイー）が主演した映画『ジャスミンの

花開く(茉莉花開/Jasmine Women)』(04年)だ。これは、1930年、1950年、1980年という激動する時代の上海を舞台に、章子怡が茉(モー)・莉(リー)・花(ホア)という三世代の女性の生き方を描いた田荘荘(ティエン・チュアンチュアン)監督の名作だ(『シネマルーム17』192頁参照)。その詳細は私の評論を読んでもらいたいが、そこで章子怡が演じた三世代の女性は、三人が三人とも前向きの生き方が強烈だった。また、その映画の中で章子怡が歌った、『茉莉花』の歌は中国蘇州の民謡だが、「庭中のどの花もジャスミンには及ばない」など、その歌詞は自立した女性として生きていこうとするヒロインへの賛歌になっていた。

ケイト・ブランシェットは第80回アカデミー賞にノミネートされた『エリザベス:ゴールドエンエイジ』(07年)(『シネマルーム18』174頁参照)でも、また『ヴェロニカ・ゲリン』(03年)(『シネマルーム4』168頁参照)でも、信念に満ちた前向きで力強い女性像を熱演していたが、さて本作では・・・?ちなみに、本作のタイトルで「ジャスミン」の形容詞として付けられている「ブルー」は「憂鬱な」という意味だが、監督44作目にしてケイト・ブランシェットを起用したウディ・アレン監督は、なぜジャスミンの前にそんな形容詞をつけたの?

■導入部だけで理解。この女は綺麗だが、かなりヘン!■

近時の日本では精神病一歩手前の神経症的病状を持った人間が増えているが、本作導入部に見るジャスミンの様子を見ていると、ジャスミンはまさにそれ。ジャスミンと名乗るこの女は綺麗だが、かなりヘン!

プレスシートには、えなみ真理子氏(スタイリスト/ブロッガー)の『もう一人の主演は、もしかしてシャネルジャケット?』というコラムがあるが、ブランド品に詳しい女性ならこれを読まなくても、飛行機の座席からサンフランシスコの空港に降り立つまで、ずっとしゃべり続けているジャスミンの服装を見て、「トータルHow much?」がすぐにわかるはずだ。残念ながら私にはそれを理解する能力はないが、それでも2つも3つも携えているトランクが、ルイ・ヴィトンのものであることはすぐにわかる。しかし、ニューヨークのセレブ界の花としてリッチな生活を送っていたジャスミンが今、妹のジンジャー(サリー・ホーキンス)の家に転がり込もうとしているのは、実業家だった夫・ハル(アレック・ポールドウィン)との結婚生活が破綻しスッカラカンになってしまったためだ。それなのに、なぜジャスミンはこんな高級ブランド品に身を包み、ファーストクラスに乗ってニューヨークからサンフランシスコにやってきたの?

荷物を受け取る間もずっとしゃべりっ放しのジャスミンに、初老の婦人はさぞ迷惑だったことだろう。しかも、その話が楽しいものならまだしも、自分の自慢話のオンパレードなのだから、たまたま座席が隣だったというだけで否応なくそれを聞かされ続けた、この婦人はお気の毒。弁護士生活を40年も続けてきた私は、何人か「この手のタイプ」の女

性を知っているが、そりゃ扱いにくいものだ。しかし、長年離れていたとはいえ、また、血の繋がりがこそないものの、同じ里親のもとで育った姉妹ともなれば、ジャスミンとジンジャーの心は通じ合っているはず。したがって、これからジンジャーの家で一緒に過ごせば、ジャスミンの新たな身の振り方は容易に見つかるのでは・・・？



『ブルージャスミン』
配給：ロングライド

5/10 (土) 公開 大阪ステーションシティシネマ、なんばパークスシネマ他にて
Photograph by Jessica Miglio © 2013 Gravier Productions, Inc.

■□■水と油の同居生活の行方は・・・？■□■

アカデミー賞助演女優賞の受賞はならなかったが、本作では「アカデミー賞助演賞ノミネートは当然」と納得できるジンジャーを演ずるサリー・ホーキンスの演技にも注目したい。『ダラス・バイヤーズクラブ』（13年）で、マシュー・マコノヒーとジャレッド・レトのコンビが主演男優賞と助演男優賞を同時受賞したのなら、本作でもケイト・ブランシェットとサリー・ホーキンスのコンビが主演女優賞と助演女優賞を同時受賞してもおかしくなかったはずだ。しかし、助演女優賞としてはやはり、『それでも夜は明ける』（13年）で黒人奴隷のパッツィー役を演じたルピタ・ニヨンゴに負けたのは仕方なし・・・？

ジャスミンとハンサムな実業家・ハルとの結婚生活が破綻した理由の一つはハルの浮気だが、金融や不動産を扱っているハルの事業はもともと胡散臭そうだった。ジンジャーとその元夫・オーギー（アンドリュー・ダイス・クレイ）が宝くじに当たったという設定は脚本としてはかなりいい加減だが、それはともかく、ジャスミンに勧められるままオーギー

一が虎の子の賞金をハルの資産運用に委ねたところ、スッカラカンにされてしまったのだから、オーギーがハルやジャスミンを恨んだのは当然。その被害を受けたのは妻のジンジャーも同じだから、ジンジャーだってジャスミンやハルを恨んでも当然だが、子供の頃から実の姉妹のように育ったジンジャーはジャスミンをそのように見ていないことがジンジャーの家での2人の「ご対面」の様子を見ればよくわかる。もっとも、それはジンジャーだけで、今彼女がオーギーとの間の2人の子供と共に生活している修理工の男・チリ（ボビー・カナヴェイル）はオーギーと同じような労働者階級の男だから、そもそもジャスミンのようなセレブな女は苦手かつ嫌いなはず。しかも、オーギーがハルの投資話に乗ったことで大損させられたことをよく知っているから、今なおその話をネチネチとしてくるので、ジャスミンはいい加減ウンザリ。そうでなくても、急激な身の上の変化によって精神安定剤とウォッカなしでは過ごせないような肉体的・精神的状態になっているのに、こんな水と油状態の中でジャスミンは無事同居生活を送ることができるの・・・？

■□■おばさん、意外にやるじゃん！そう思ったが・・・■□■

ハルとセレブな生活を送っている時のジャスミンが、ハルの仕事のインチキ性に何の疑惑も持たなかったかというそうではなく、あえてそういう疑惑を無視してきたというのが正直なところ。そうかどうかはジャスミンに直接聞いてみなければわからないが、ジンジャーのもとに転がり込んでからのジャスミンは、曲がりなりにインテリア・デザイナーへの転身を計画していたから、おばさん、意外にやるじゃん！という感じ。

そのためには、まずはパソコンだが、その受講料を稼ぐため、ジャスミンは渋々ながら歯科医の受付係の仕事を始めることに。もっとも、仮に私の法律事務所でジャスミンのような中年女性を受付係で雇うかといわれると、それは絶対ありえない。したがって、これまでろくな仕事もしていないジャスミンを歯科医のフリッカー（マイケル・スタールバーグ）が雇ったのは、何らかの思惑があったはずだ。コミカルな脚本とコミカルな映像が大好きなウディ・アレン監督は、そんなセクハラまがいのドタバタ劇をユーモラスに見せてくれる。これを裁判沙汰にすればきっとジャスミンの勝利になるはずだが、目下のジャスミンにそこまでの意欲を持てなかったのは仕方ない。何もかもうまくいかないジャスミンはその後一層精神のバランスを崩し、ところかまわずブツブツと独り言をつぶやくようになってきたから、こりゃヤバイ。

ちなみに、テネシー・ウィリアムズの名作『欲望という名の電車』のヒロイン、ブランチ・デュボア役は『放浪記』で林芙美子役を演じ続けた森光子のように、文学座の杉村春子の十八番だったが、このままいけばジャスミンもブランチと同じように破滅していくのでは・・・。

■□■待てばいいの？チャンスは自分で！■□■

シンデレラはたまたま理想的な「王子様」に巡り合うことができたが、本来それは宝くじに当たるのと同じくらい低い確率。そのことを世の女性の多くが理解しないから、さまざまなミスマッチが起こるわけだ。しかして、どん底状態にあるジャスミンのような中年女にシンデレラのような「出会い」が訪れることはないのが普通だが、それを可能にするのが作り物の映画。しかも、どんな脚本でもOKというウディ・アレン監督だから、その手のストーリー展開はお手のものだ。

ある日、友人のジェーン（タミー・ブランチャード）の勧めで出席したパーティーでジャスミンが出会ったのが、エリート外交官のドワイト（ピーター・サースガード）。ちょっと突っ込んだ話をしてみると、何とドワイトは数年後に下院への進出を目指しているという超エリートであるうえ、すぐ近くの別荘を購入したところなので、そのインテリアのすべてをジャスミンに任せたいというから、こりゃ理想的。つまり、映画の脚本はどうにでも作れるということだ。

初対面ながら、ここまでズバズバと身の上話をするスピード感もウディ・アレン監督特有のもの。そして、そんな場面ともなれば、女は平気でウソをつける動物だ。いやいや、失礼。ジャスミンに言わせると、「仕事はインテリア・デザイナー。夫は外科医だったけど、心臓発作で死亡。子どもはなし」という自己紹介は「ウソ」ではなく、「脚色」だそう。なるほど、なるほど。ジャスミンのような中年女に理想的な「王子様」がいくら待っても現れないのは当然だから、待つだけではダメ。チャンスは、ウソをついてでも自分の手で掴み取らなければ！

■□■姉が大成功なら、妹だって・・・■□■

セレブな生活を長年送ってきたジャスミンにとって、華やかなパーティーは生活の一部だが、ジンジャーにとってそれはある種の苦痛。ところが、ジャスミンがやってきて以来、チリとの揉め事が絶えないジンジャーが、ジャスミンの誘いに乗ってそのパーティーに出席したところ、ジンジャーにも大収穫が。それは、腹の出っ張った中年男、アル（ルイス・C・K）との出会いだ。ジンジャーがアルと意気投合したのは、どうも「その方面」について2人とも「好きもの」だったためらしい。そのため、その日のうちの初セックスどころか、別れるときは車の中で二度目のセックスまでも……。多分ジンジャーはこの時点でチリと別れることを決心していたのだろうが、後日デートの場所に現れないアルに電話してみると、なんとアルにはレッキとした妻がいることが判明。アレレ……。

このパーティーへの出席はジャスミンとジンジャー姉妹にとって最高の幸せのステップになるはずだったが、まずはジンジャーの思惑は外れてしまったようだ。すると、ひよつとして、あまりにも出来すぎの感があるドワイトの方は……。

■□■ウソはいつかばれるもの・・・■□■

世の中には「結婚詐欺」というレッキとした「犯罪」がある。しかし、所詮男と女の仲は「騙し合い」というのが古今東西、何千年と続いてきた歴史だから、法律だけで男女問題ををはかれないのは当然だ。現に、ジャスミンの説明だって決してウソではなく、男女関係に夢を持たせるための脚色なのだから・・・。

ウディ・アレン監督の映画は2時間以内で終わるものが多いが、それは論点を絞りスピーディーな展開を目指しているため。そんないつもの進行方法(?)に従って、ジャスミンとドワイトの2人は早々に初セックスを済ませ、豪華な別荘のインテリアもほぼ決定。そして、そんな濃密なデートを重ねる中で、ついに今日はドワイトから正式に結婚の申し込みが……。これにジャスミンが有頂天になったのは当然だ。そんな中、私の心配はジャスミンのウソがいつばれるの?ということだ。さて、ウディ・アレン監督が描く本作ラストの結末は・・・?

株の世界では「山高ければ谷深し」ということわざが不変の真理を物語っているが、多分それは男女関係でも同じ。幸せの度が高ければ高いほど、それが壊れてしまったときの悲しみは大きいはずだ。本作ラストには、意外にもジャスミンとハルの一人息子ダニー(オールデン・エアエンライク)の成長した姿が登場し、ジャスミンとの再会を果たすが、さてそこでダニーがジャスミンに対して投げかけた言葉とは?さらに私は、ジャスミンの没落はジャスミンの夫ハルの事業の悪事がバレたところから始まったとばかり思っていたが、何と本作ラストに明かされるその真相とは?これでは、本作ラストのシーンとなる、落ちぶれてしまったジャスミンの姿はまさに自業自得、女の浅はかさの典型のようなものだ。しかし、ここまでの演技をやったのけたからこそ、本作のような「小さな作品」でアカデミー賞主演女優賞を受賞することができたわけだ。改めて、本作に見るケイト・ブランシェットの素晴らしい演技に拍手!

2014(平成26)年4月18日記

ケイト・ブランシェットの受賞スピーチに注目!

1) 絶世の美人とは言えないが、べらぼうに背が高いケイト・ブランシェットは、アカデミー賞でのレッドカーペットや華やかなドレス姿が映える。

2) そんな彼女の主演女優賞の受賞スピーチは、「いまだに女性の主人公を中心とした映画はニッチ市場向けだと愚かにも考えている人たちがいるけれど、もうそんなことはないわ。映画ファンはそ

ういう映画を観たがっているし、実際にちゃんと稼いでいる。地球は丸いのよ、皆さん」と刺激的。映画の中ではおバカキャラだったが、このスピーチは映画における女性パワーを強調した堂々たるものだ。

3) もっとも、これはいまだに「男の世界」なハリウッドの裏返し・・・?

2014(平成26)年5月3日記